

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530403

研究課題名(和文) イギリス農業革命研究の残された課題：農業は人口増大にどのようにして応えたのか

研究課題名(英文) An Enquiry into the English Agricultural Revolution: population growth and agricultural production, 1750-1850

研究代表者

國方 敬司 (KUNIKATA, KEIJI)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：70143724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：イギリス農業革命は、従来の穀作地帯であったミッドランズ中西部が牧畜経営地帯へと転換する一方で、イングランド東部の牧畜経営地帯であったフェンや軽土地帯が主要な穀作地帯となることで達成された。しかしこの農業生産構造の転換や生産力の上昇は、少数の要因によって実現したわけではなかった。多様な要因がそれぞれの農業地帯別に組み合わせられ、適用されることによって成就したのである。

しかもそれらは時系列的には数次にわたって導入される一方で、そうした改良要因が累加的に蓄積され効果を発揮することで実現したように思われる。

研究成果の概要(英文)：The English Agricultural Revolution involved the transformation of farming regions. The central Midlands and adjacent areas, a conventional grain product zone, were converted to pasture lands, while the Fens and the heavy claylands in eastern England, livestock farming districts, became wheat suppliers. However, the conversion of farming regions and the increase in grain productivity were accomplished by a variety of agricultural improvements and innovations which were applied to each farming region in a different and suitable combination.

Moreover, it seems that these improvements and new techniques were introduced in a gradual manner over a long period, and they produced their effects cumulatively.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：経済史 イギリス農業革命 農村史

## 1. 研究開始当初の背景

(1)イギリス農業革命の研究は、わが国においてもかつては盛んにおこなわれてきたが、最近は十分に関心が払われることがなくなってしまった。そのために、英米において進められてきた研究成果も十全には紹介されることなく、英米におけるイギリス農業革命に対する認識とわが国における認識との間には大きな隔たりができてしまった。

(2)こうした研究状況において、従来の農業革命の研究は、当時の問題関心からして農業技術そのものあるいはエンクロウジアといった問題に関心が集中しており、18世紀後半から急伸するイングランドの人口増大にイギリス農業はどのように対応していったのか、といった点には関心があまり払われなかった。

(3)さらに言えば、急速に農業人口を減少させながら、一方で工業人口の増大に伴う工業原料としての農産物に対する需要増大に、下落した農業人口比率で如何に対処しえたのか、といった観点からの検討は必ずしもなされなかった。

## 2. 研究の目的

(1)本研究はかかる研究状況に対して、イギリス農業を研究してきた3名の研究者によって、それぞれの研究対象地域を基盤にして、イギリス農業革命の具体像を解明することを目的に研究を進めていくことになった。

(2)イギリス農業革命については膨大な研究が蓄積され、多種多様な問題がさまざまな観点から検討されてきた。しかし先述のように、18世紀後半から19世紀半ばまでのイギリス農業が、農業人口の比率を低下させながら、増大する非農業人口にどのように安定的に食糧を供給しえたのか、あるいは工業原料たる農産物の需要増大に応えたのか、という最も根本的な問題については十分に検討されていない。

(3)本研究ではその問題について、従来の穀作地帯であったミッドランズ中西部が牧畜経営地帯へと転換する一方、イングランド東部の牧畜経営地帯であったフェンなどが主要な穀作地帯へと変貌する過程を具体的に分析しながら、いかに穀物生産高を上昇させていったのかを解明する。

## 3. 研究の方法

(1)Tithe Filesをはじめとして18世紀から19世紀半ばにかけての農書、あるいは囲い込み関係文書や地方紙の記事などを渉猟しながら、つぎのように研究を進めた。

(2)穀物の生産適地たるイングランド東部における18世紀から19世紀前半にかけての耕作地の拡大と穀物収穫高の上昇を、伊藤栄晃が分析する一方、武長玄次郎は、一定地域の囲い込みの実態を検討する。國方敬司は、南西部における穀物生産と牧畜経営の変容過程を解明することで、全体としての穀物生

産の推移を検証する。その際、伊藤は、従来から検討を進めてきたケムブリッジシアのウィリングム教区を中心に据える一方、武長は、バッキンガムシアのプリンシーズ・リズバラ教区を中心とした地域における囲い込みについて検討する。國方は、イギリス農業革命の全体像について検討するとともに、ウィルトシアにおける農業構造の転換過程について検討する。

## 4. 研究成果

(1)穀物増産の要因として大きな意義を有するイングランド東部のフェンランドにおける牧畜から穀作への転換は、従来、それほど重視されてこなかった。というのは、フェンの開墾・干拓については18世紀前半までにはほぼ終了し、人口急増期である18世紀後半以降の穀物増産にはあまり寄与しないと見なされてきたからであった(Eric Kerridge, *The Agricultural Revolution*, 1967; Mark Overton, *Agricultural Revolution in England*, 1996)。

しかし、この開墾・干拓に関しては、検討の結果、従来の通説は維持しえないように思われる。フェンランドが実際に大穀物生産地に転換するのは、19世紀に入ってから、特に1830年頃からであった。17世紀・18世紀の干拓事業では、安定した排水機能を維持することができなかったからである。19世紀に入って大穀物生産地に変貌した背景として、一つには大規模な土木工事が進捗したことが挙げられる。また一つには、気まぐれな風まかせの風力による排水から、工業化の賜物である蒸気機関の導入による安定的かつ強力な排水が可能になったことも挙げられよう。そしてこの安定した干拓事業と連動して、粘土散布の進展による生産力の上昇を確認することができる。その結果、例えば、1836年の農業不況に関する特別委員会において、ポーストンの小麦取引は、1829年の72,964クォータから1834年の131,370クォータに急増したと証言されるに至っている。

(2)エンクロウジアについて言えば、わが国にあっても椎名重明氏をはじめとして重富公生氏らによって詳細な検討が加えられてきた。武長は、このエンクロウジアの問題を、農業生産との関わりを観点をも加味しながら、バッキンガムシアのブレッドロー、プリンシーズ・リズバラ、モンクス・リズバラの3教区において実際に囲い込みに関わった者たちの人的関係を検討した。

その検討によって得られた知見では、これらの教区に関する議会法案では農業の生産性に寄与することを目的に囲い込みを実施すると謳いながら、現実には農業生産の改良が試みられたとはみられず、生産性の上昇は起こらなかった。そして、囲い込み後には教区民を工業化の進行する北部に組織的に送り出すことになった。

それでは、どのような意図から囲い込みが

推進されたのか。上記3教区の囲い込みにかかわった人たちについて調査を加えると、そこから囲い込みチームとでも呼べるような強い人的関係が築き上げられていたことが浮かび上がる。この実態から、囲い込み委員や書記、測量士、そして大土地所有者やその代理人などの一部関係者に利益をもたらさんがために囲い込みが推進された結論づけることが許されよう。

エンクロウジアについては、農業生産といった観点からだけでなく、土地所有権の確立といった視点や、いわば当時流行となった合理性を欠いた「改良」行動など、様々な見地から追求すべき論点が多々残っている。

(3)すでに指摘したように、フェンの干拓などはかなり遅い時期に進行したが、ケムブリッジシアでも、干拓・囲い込みは19世紀半ばという非常に遅い時期に多く実施された。「産業革命」やナポレオンの「大陸制度」は、イギリスの農産物需要を高めたものの、ケムブリッジシアにおいては土地制度を変革する直接的な契機にはならなかった。伊藤栄晃は、このタイム・ラグが生ずる理由について説明を進めた。その説明の第一歩として、議会囲い込みを経験しない伝統農業、とりわけ共同耕地制農業が、いかにして生産性の向上を実現させたのかを明らかにする。

1) ケムブリッジ市の穀物市場における小麦相場の推移を、18世紀末から19世紀半ばにかけて見ると、(名目)価格の季節的変動が次第に平準化する傾向が観察される。これは、当州を含む地方全体の小麦供給量が一般的に増大し、従来の春夏期の穀物不足という状態がほぼ解消されたことを示すと同時に、伝統的農業生産体制のもとでも穀物生産をかなりの程度拡大しえたことを示すものである。

2) 共同耕地農業が「資本主義的」に再編利用されうるとはRobert C. Allenも示唆している。伊藤は、1840年頃まで共同耕地制をほぼ無傷のまま維持していたケムブリッジシアのWillingham教区の事例を、「十分の一税査定記録」やその付録「十分の一税地図」などを用いて分析した。

そこでは、耕圃・耕区・地条の三層構造がよく残され、囲い込み地はほとんどみられない。また、農民たちの土地は、地条を単位として耕圃・耕区内に互いに分散していることが確認できた。まさに、Frederic Seebornらの中世三圃制農業の古典的モデルといえる。

しかしながら、他方で、一部農民が多くの土地を有する一方、1~2片程度しか保有しない農民が存在するという、社会的分極化が進んでいたし、「コテナム・チーズ」という高級クリームチーズの市場向け生産が盛んであるという、農業の商業化も相当程度進行していた。

つまり、古典的三圃制は、「工業化」時代の経済的な要請にかなりの程度応えることができた生産体制であったと評価できる。

3) 史料を精査すると、多くの土地をもつ指導的農民グループが、互いの土地を錯綜した形で保有しており、囲い込みを相互に牽制し合っていること、また、耕作地に比して入会権はあまり集中されておらず、下層の農民にも広く共同地の利用が許されていることが判明する。この事実は、共同耕地制は大規模農民の合意の下で維持される一方、村の主産業たる酪農は主に下層の農民によって担われていたことを物語っている。

4) この市場経済的に編成・組織された共同耕地制は、農業生産上の必要だけから崩壊したわけではなかった。むしろ、国内労働市場の変化や、地域住民の知識向上と域外への関心の高まりによって崩されていった。ウィリンガムでは、1830年代から子どもの出生数が顕著に低下する。それは、若年カップルの村外流出によってもたらされた。この頃までに、例えば、バプティスト教会による村民への教育・啓蒙活動が活発化するとともに、乗合馬車の利用や家畜保険の導入などが地方新聞の紙面にみられるようになるのである。

5) 伊藤は、イギリス農業革命についてつぎのように総括する。1840年代に議会囲い込みを経た後、ウィリンガムの人口は停滞し、農民の年齢も全般的に高齢化してゆく。製造業や金融サービス業に比較優位をもつ国際分業体制を自ら主導して作り上げたイギリスにおいて、農業は産業部門としては維持が難しくなり、農村は過剰人口の受け皿としての役割を担うようになったと考えられる。

古典的「農業革命」期における農業生産の増進においては、大規模農場にもまして、中小規模農民が、伝統的農業・土地制度の下で、どのように、またどの程度貢献したか、その説明が重要な課題として残されている、と指摘する。

(4)18世紀末のウィルトシア農業は特徴ある2つの農業地帯から構成されていた。北部・西部は低地のウッドランドで、牧畜経営のみならず毛織物工業も盛んに営まれていた。それに対して、南部・東部はSalisbury PlainやWiltshire Downsとよばれるゆるやかな丘陵とヴェイル(vale)からなる地帯で、牧羊と結合した穀作地帯となっていた。この北部・西部と南部・東部の特徴は、16世紀には明確に形成されている。この農業地帯が19世紀前半にどのように変化したのか。

1) 南部の穀作地帯では家族農場の衰退が生産コストの競争力面で大農場に対して劣勢なために18世紀末までに顕著に進み、19世紀には資本家的大農場の時代に入る。

2) 南部の穀作地帯での土地の生産性については、顕著な上昇はみられない。小麦については大目にみて1811年の22 b.から1850年の28 b.への上昇がみられただけで、これでは27%ほどの上昇にすぎない。これでは、18世紀末からの人口急増に対してウィルトシア農業の寄与するところは微弱だったということになる。

3) しかし、南部穀作地帯では、18世紀以降も、農業生産の改良が次々と取り入れられ、それが耕地面積の拡大を持続的に促進していたとみられる。ナポレオン戦争期に穀作が伸張したことはよく知られているが、通常、戦争終結以降は耕地の拡大は停止するものとみなされてきた。しかし、ウィルトシア南部では、1830年代以降も耕地化が進展する。それには、人工肥料の多投、カブなどを組み入れた輪作の改良、ライグラスといった新たな牧草の導入などによる羊の飼育頭数の増大と結果としての肥料の増大が寄与していた。また、羊の品種転換や冬季における飼育方法の改善も指摘できよう。

さらに付言するならば、1840年代はじめにスインドンとロンドンとが鉄道で結ばれると、馬の飼料である燕麦などの重要性は低下し、アブラナやカブなどの栽培に一層比重が移る。これがまた、羊の飼育頭数を増やし、ひいては穀物栽培地の拡大を促進した。

こうした放牧地から耕地への転換は、たとえば Allington (18世紀に約300 a.が放牧地であったのが、1840年までに放牧地は181 a.に減少) や Amesbury (1809年に1,454 a.の放牧地と1,238 a.の耕地であったのが、1825年までに耕地が1,600 a.にまで増え、さらに1845年頃まで耕地化が進行) など、牧羊=穀作地帯の多くの教区で確認できる。もっとも、その全体像を明らかにすることは今後の課題としたい。ともあれ、肥料や作付作物の改良とそれに伴う羊の飼育頭数の増大による、地味の薄い土地における耕作拡大こそが、ウィルトシア南部における農業の特徴であった。

一方、北部では共同耕地のエンクロウジの進展とともに、耕地から牧草地への転換が進み、酪農経営への傾斜が一層進んだことも指摘しておきたい。

4) 南部の耕地農業を支える労働力として、北部の産業空洞化によって生じた過剰人口が季節労働者として動員されたことも特徴の1つとして挙げることができよう。

そして、これまであまり注目されてこなかったのであるが、北部の酪農と肥育を柱とする畜産経営も、豊かな社会へと変化するイングランドにおいて重要な食糧供給を果たしていたのであり、この分野では家族農場が競争力を維持しつづけることができたことも1つの特徴として指摘しておきたい。

5) 以上のように、畜産経営地帯と穀作経営地帯とに明確に分離し、それぞれが独自に発展しているウィルトシアの場合、州を単位として扱うと、それぞれの発展の特徴を相殺し、その特徴を検出できないのではないかと考えられる。これまで、統計的な処理は州単位で行われてきたが、ウィルトシアのような異なる農業地帯で構成される場合には、それらの平均値は必ずしも農業発展の姿を正しく反映しないのではないかと、と思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

伊藤栄晃, 「盛期ジャマイカ砂糖農園における奴隷の出生と死亡 『グッドホープのジョン』所有の6農園の事例」, 第80巻1, 2014年, 査読有(未刊行)

國方敬司, ロック「土地所有権」論と批判の系譜, 山形大学歴史・地理・人類学論集, 第15号, 2014年, pp11-37, 査読無

國方敬司, イギリス農業革命はどのようにとらえられるべきか プロザロウ再読, 山形大学紀要(社会科学), 第44巻2号, 2014年, pp.1-20, 査読有

國方敬司, 『大英百科事典』にみる19世紀はじめのイギリス農業, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 第9号, 2012年, pp.13-49, 査読有

伊藤栄晃, 近代イングランドにおける共同耕地制論の変容, 経済学紀要(関東学園大学), 第37集, 2012年, pp.1-105, 査読無

伊藤栄晃, ウィリンガムの共同耕地制と村社会, 経済学紀要(関東学園大学経済学部), 第37集, 2012年, pp.107-247, 査読無

武長玄次郎, イギリス議会囲い込みにおける境界の問題, 木更津工業高等専門学校紀要, 第45号, 2012年, 21頁-25頁, 査読無

國方敬司, イギリス農業革命からみたフェンとマーシュ, 東北学院大学『経済学論集』, 177号 2011年 pp.151-163, 査読無

[学会発表](計 5 件)

伊藤栄晃, Births and Deaths of Black Workers on the Sugar Estates of 'John Tharp of Good Hope' in Jamaica, Agricultural History Society's Annual Conference 2013, 2013年6月15日 Banff, Canada

國方敬司, 農業構造の転換と脱工業化, 社会経済史学会, 2013年6月2日, 東京大学

伊藤栄晃, 18・19世紀イングランドにおける穀作地の『東漸』, 社会経済史学会, 2013年6月2日, 東京大学

武長玄次郎, イギリス議会囲い込みにおける人的関係とその本質, 社会経済史学会, 2013年6月2日, 東京大学

伊藤栄晃, A Combination of Market Economy and Communal Farming: The Common Field System of the Nineteenth-century Willingham, The 9th European Social Science History Conference, 2012年4月11日, Glasgow

6 . 研究組織

(1)研究代表者

國方 敬司 (KUNIKATA, Keiji)  
山形大学・人文学部・教授  
研究者番号：70143724

(2)研究分担者

伊藤 栄晃 (ITO, Hideaki)  
関東学園大学・経済学部・教授  
研究者番号：60213071

(3)連携研究者

武長 玄次郎 (TAKENAGA, Genjirou)  
木更津工業高等専門学校・人文学系・准教授  
研究者番号：00322991